

建築物の言語描写における〈間〉の多義性

学籍番号 23413524 氏名 加藤 聖仁

指導教員 北川 啓介 准教授

はじめに 一般的に間は日本独自の概念的な言葉であり、読み方の違いによって様々なニュアンスをもっている。この間のもつ意味合いは、人が空間を体感する際にも同様のことがいえ、「ガラス戸が内部空間と外部空間の間合いをとる」といったような、空間を構成する要素同士の関係を保つ役目を果たしている。本研究では、建築物の言語描写における間の多義性を明らかにすることを目的とする。

研究対象 本研究では、建築専門雑誌『新建築』の1950年から2011年までを研究対象とし、2つの事物のあいだに生じる事象を〈間〉と定義したうえで、〈間〉について記述された711事例を研究対象とする。

研究方法 研究対象とした言語描写から、〈間〉を生み出す要素を事物、〈間〉を表現する語を〈間〉の種類、〈間〉が空間に及ぼす効果に関する記述中の動詞を作用、作用を受ける名詞を対象として抽出し、分類する。まず、事物同士の関係の傾向を整理し、〈間〉を生み出す状況の組合せを分類する。次に、対象と作用の組合せから〈間〉がもたらす空間効果を導出する。さらに、〈間〉の種類に対する状況、空間効果のそれぞれの相関分析を行い、〈間〉の多義性について考察する。

対象と作用の組合せからみる空間効果 〈間〉と空間の関係性を考察するため、作用と対象のクロス集計から〈間〉が空間に及ぼす効果の特性を考察した。その結果、52種の空間効果の特性として導出することができ、それらの意味内容を考察した結果、人間の認識に着目した現象的側面、空間の向上性に着目した機能的側面、人間に引き起こる心情に着目した感情的側面の3つの枠組みで捉えることができた。

〈間〉の種類と状況の相関分析 〈間〉の種類と〈間〉を生み出す状況の組合せによる相関分析を行い、散布図から両者の分類の傾向を整理した(図1)。《行・行》は、{間}と組み合わせ、人間の行為により連続的に変化する景色の一瞬を〈間〉と捉えている。これらは、実体をもたない

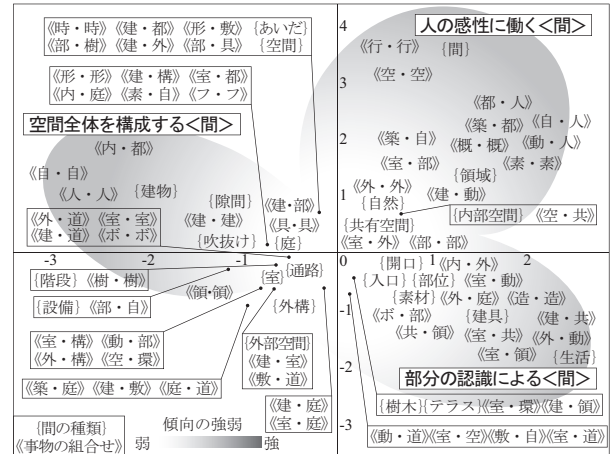


図1 〈間〉の種類と状況の相関分析散布図

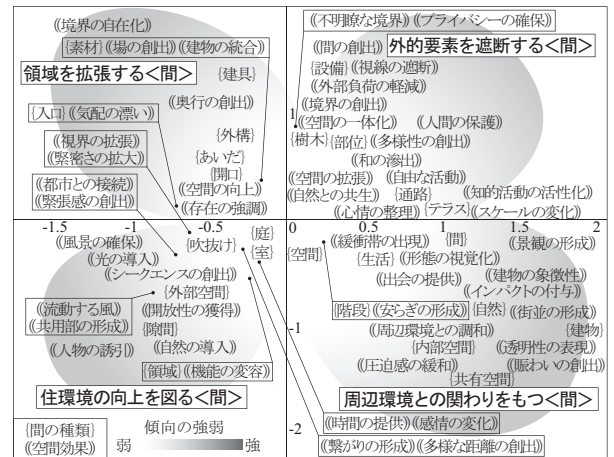
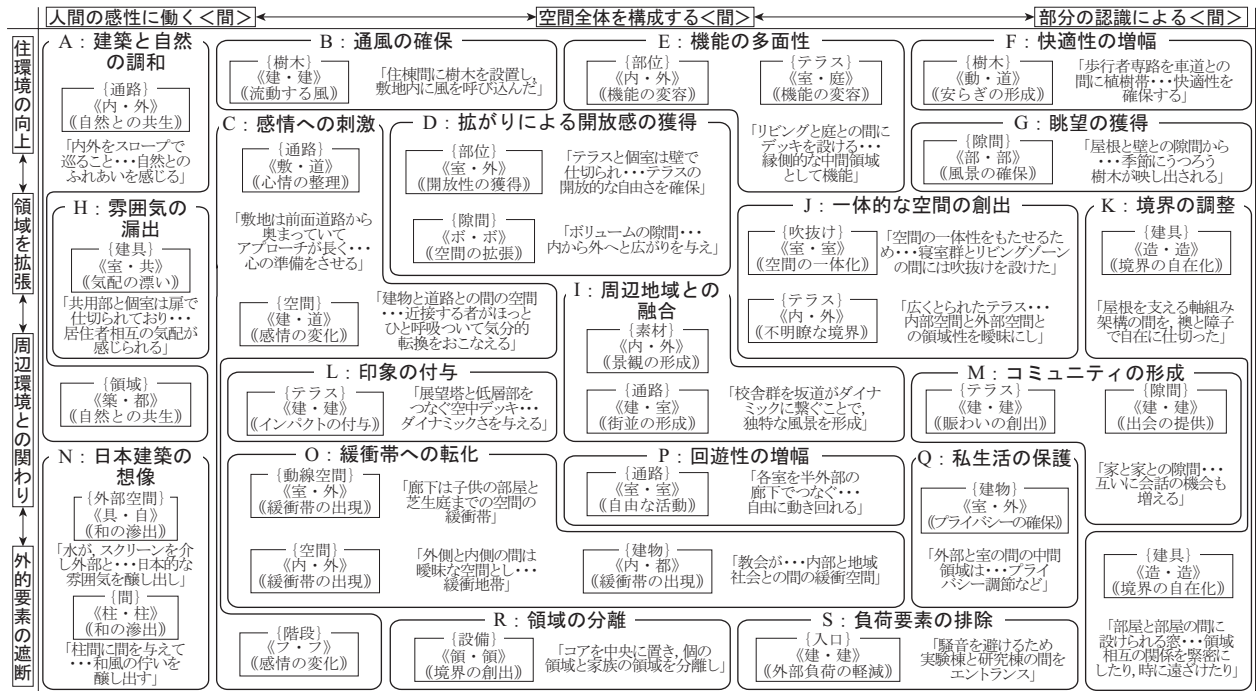


図2 〈間〉の種類と空間効果の相関分析散布図

事物が人間の感性に働きかける〈間〉の性質が表現されている。《室・共》は、{建具}や{素材}と組み合わせ、事物の境界の部分にあたる建築物の部位を〈間〉と捉えている。これらは、建築部分を認識することによる〈間〉の性質が表現されている。《建・建》は、{隙間}や{建物}などと組み合わせ、隣棟との関わりをもつスペースを〈間〉と捉えている。これらは、空間全体を構成する〈間〉の性質が表現されている。

〈間〉の種類と空間効果の相関分析 〈間〉の種類と空間効果による相関分析を行い、散布図から両者の分類の傾向を整理した(図2)。《境界の自在化》は{建具}と組み合わせ、境界として存在する〈間〉を意のままに操作すること



※図中 { } は<間>の種類, () は<間>を生み出す状況, [] は記述例, □ は組合せ例を示す。
 図3 <間>の種類と<間>を生み出す状況と空間効果からみる<間>の多義性

で領域の拡張を表現している。これらは、領域を拡張する<間>の性質が表現されている。《流動する風》は {隙間} や {室} などと組み合わせたり、室内における通風を確保することで、快適性を増す表現をしている。これらは、生活に関わる住環境の向上を図った<間>の性質が表現されている。《圧迫感の緩和》は {内部空間} や {建物} などと組み合わせたり、建物自体を周辺地域への圧迫感を抑える緩衝帯として表現している。これらは、周辺環境との関わりをもつ<間>の性質が表現されている。《視線の遮断》は {樹木} や {部位} などと組み合わせたり、<間>を外部的要素を遮断する媒体として表現している。これらは、外的要素を排除する<間>の性質が表現されている。

<間>の種類と状況と空間効果からみる<間>の多義性
 <間>の種類・<間>を生み出す状況・空間効果の特性の傾向を重ね合わせた結果、少なくとも19種の多義性を導き出すことができた(図3)。B, F, G, Q, Sは、室内の環境を向上させる側面をもつ<間>や、外部負荷である騒音や気象を遮断する側面をもつ<間>などがみられた。これらの<間>は、居住者の快適性を重視した生活空間を創出する性質をもつ<間>であるといえる。A, I, M, Oは、建築と自然の共生を促進させる媒体としての側面をもつ<間>や、異なる空間同士の相互貫入を和らげるために緩衝帯としての側面をもつ<間>などがみられた。これ

らの<間>は事物同士の関係を保ち両者を融和させる性質をもつ<間>であるといえる。C, D, H, L, Nは、人間の存在を感じさせる側面をもつ<間>や、空間の広がりや日本建築の佇まいを醸し出す側面をもつ<間>などがみられた。これらの<間>は、空間を知覚させる性質をもつ<間>であるといえる。E, J, K, P, Rは、空間の境界を自在に操作できる側面をもつ<間>や、多様な空間を生み出す側面をもつ<間>などがみられた。これらの<間>は、空間の機能性を重視した性質をもつ<間>であるといえる。

結論 間の生じる状況として、実体をもたない抽象的な事物の関係を結ぶ虚像としての間、認識または操作することのできる具象的な事物の関係を結ぶ実像としての間といった、2つの枠組みで捉えることができた。虚像としての間は、建築や都市、自然といったスケールの大きい抽象的な事物の関係から生じやすく、空間全体の調和を図る構成の際に用いられていた。それに対し実像としての間は、室や部位といったスケールの小さい具象的な事物の関係から生じやすく、人を取り巻く環境の向上を図る際に用いられていた。また、人間の行動により生じるものや行為を誘発するものがあり、設計者は間を人の感性に作用する事象としても捉えている。以上より、設計者は事物同士の関係を考慮する際に、抽象性と具象性の性質に着目し、両義的な側面をもつ間を適宜使い分けることで空間を構成していた。